光の泡に囲まれて

茶和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の泡に囲まれて

【Nコード】

N5838T

【作者名】

茶和

【あらすじ】

仕事場へのお気に入りの道みち。いろんなことが想いに浮かびます。

白い光のなかで…

(前書き)

仕事場へのお気に入りの道みち。いろんなことが想いに浮かびます…
白い光の一日のはじまり、自由詩に託して…

大学へは何通りかの道順がある。通勤に馴れないうちは一番人通りの多い道を学生達に混じって歩いていたのだが、ゴチャゴチャとして歩きづらしい、何より交通整理のシルバーさん達の無愛想さに出会うのが憂鬱過ぎて、ついに別の道を見つけた。このあたりの地域は道が複雑で、東西南北の感覚がなかなか役に立ってくれないので、新しい行き方を開発するのは勇気があるのだ。実を言えば、新しい道は自分で見つけたのではなく、見つけた同僚から教えてもらっただけのことだ。

駅前の小さなロータリーを越えて住宅街の中に入り込み、左へ右へと曲がりまくる。電信柱には「あいさつで 友達の輪にとびこもう」と、標語が貼つてある。違うのだ。内気な引つ込み思案の子にとって、得体の知れない馴染みの薄い集団の中に飛び込むことは、5メートルの高さからプールに飛び込むことに等しい。挨拶をすれば、なんて、簡単にはいかないのだ。むしろ、「あいさつで 友達の輪に誘おうよ」。こんな標語は無理ですか？

何回か曲がった後、左側に急な下り坂が開ける。坂の下には何棟かの団地がある。ここからの道は本当に好きだ。急な下り坂を歩きながら左に右に目をやる。左側の、白い外壁に赤い外階段のある二階建ての家は入口からは荒れた狭い庭しか見えないが、奥に行くにしたがって深い緑が繁つているに違いない。この季節はバラが香っているだろう。庭はその先急な坂となり、ひっそりと木立に抱かれる湖へと続いているだろう。それはあり得ない景色だろうか。いや、そう思い続けるならそれは本当にそうなるに違いない。

この道を通るとき、すれ違う人達はいつも同じ、子供を乗せた自転車を押している女性と、手すりに掴まりながら上つて来る年配の女性だ。年配の女性とは、目と目で挨拶をする仲になった。

私は軽やかに坂を下り、右に曲がる。団地の中の道を歩く。古い

団地の前には庭のスペースがあつて、季節の花が咲き誇る。建物と釣り合いの取れた日本的な飾り気のない花に、気持ちや和んでくる。犬の散歩に出会うこともあり、市内を巡るバスにはいつも同じ角で出会う。そこからは左側に大学のグラウンドがある。銀杏並木が続く。大学の掃除のおじさんと気持ちよく挨拶をかわす。そして、守衛さんのいない南門から入る。

坂を下るときは足元は見ない
あごを上げ 空を見上げながら
息を吸い込んで はずみ下る
光の泡たちが 顔を包み
首を振ると

いい香りが立ち昇る
このまま下りきつたら
きつと海

ボードをかかえたまま
戻って来なかった人は
きょうなら戻って来てくれるのだろうか
あの日も光の泡は
群れる蛍のように立ち昇っていたが
きょうなら

消えてしまわずに
彼を囲んで
立ち昇り続けるのだろうか
つながる日々は 白く
音も聞こえず
静かな平安は
これ以上ないほどに

(後書き)

ひとつ前を曲がっていたら。あの一言をいわずにいたら。あのとき
私が微笑んだなら。

そんなこともみんな、白い光のなかです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5838t/>

光の泡に囲まれて

2011年10月9日02時21分発行